

卵用鶏飼料給与制限試験

大津留 公・中西正士・藤田 公

(大分県農業技術センター畜産部)

OTSURU, I., NAKANISHI, M., and FUJITA, H.

Feed restrition for laying hen.

I. 緒 言

育成期および成鶏期に飼料の制限給与によって、小格育成して性成熟を抑制し、初産時卵重増と産みづかれを軽減すると同時に、管理労力の省力化と経済性を究明したので、その成績を報告する。

II. 試験方法

(1) 試験区分：昭和43年5月孵化のものを、表-1のとおり区分し、試験期間は、8週齢より68週齢迄とした。

第1表 試験区構成

項目 区分	育 成 期		成鶏期	摘 要
	0-8w	8-22w		
対照区	ad, lib	ad, lib	ad, lib	飼料:配合飼料
試験1区	〃	〃	½ skip	〃 〃
〃 2区	〃	½ skip	ad, lib	〃 〃
〃 3区	〃	〃	½ skip	〃 〃

(注) :ad, lib→自由摂取

½ skip→24時間自由摂取させ次の24時間は制限給与の回復給与

III. 試験成績および考察

成績の概要は、表-2のとおりである。

第2表 成績の概要

項目 区分	育成率 (%)	生存率 (%)	初産日齢 (日)	産卵率 (%)	生産量 (g)	飼料摂取量 (g)	飼料要求率	体 重		
								22w (g)	44w (g)	68w (g)
対照区	96.0	91.6	196	61.6	36.7	107.7	2.93	1675	2080	2278
試験1区	98.0	100	215	52.5	31.8	94.1	2.95	1642	1798	1610
〃 2区	98.0	97.9	208	64.5	39.0	106.1	2.73	1449	1929	2147
〃 3区	98.0	93.8	217	50.6	26.6	89.9	3.27	1378	1578	1145

考 察

(1) 体重：育成期に½ skip 給与すれば、対照区対比82.2~86.5%程度に増体量の抑制を認め、成鶏期 ad, lib 給与に切り替えると、44週齢では92.7%に回復し、終了時では92.2%となった。全期間½ skip は、最も増体量が小さく、68週齢では70.6%となり有意

差を認めた。

(2) 飼料摂取量：育成期½ skip 給与では、育成期間で対照区対比92.2%、成鶏期では92.2%の摂取量であり、試験区では、2区がすくない摂取量であった。

(3) 初産日齢：育成期½ skip 給与の試験2, 3区では対照区より12~21日おくれ、初産体重も小さく、卵重は大卵であった。

(4) 産卵率：育成期に½ skip 給与の試験2区は、初産日齢の影響で、31~34週齢の産卵率は対照区より低い成績であったが、35週齢以降の産卵率は、対照区より優れ、全期間では2.9%優れた。また、全期間½ skip 給与の試験3区は、対照区より11.0%低い産卵率で最も低い成績であった。

(5) 生産卵量：産卵率と同様の傾向を認めた。

(6) 卵重：育成期½ skip 給与の試験2区が、最も大きい卵重で対照区より0.9%大であった。

(7) 飼料要求率：育成期½ skip 給与の試験2区が最も良く、2.73で改良目標に達する成績であった。

(8) 強健性：½ skip 給与制限が育成率および生存率におよぼす悪影響は認めなかった。

(9) 経済性：卵1kg生産費を飼料のみで試算すると、対照区 118円、試験1区 121円、試験2区 109円、試験3区 138円となり、試験2区が最もすくない飼料で卵1kg生産ができた。

以上、要約すると、育成期から成鶏期の全期間½ skip a-day 給与では、産卵率、卵重、生産卵量などに悪影響を認めたが、生存率には悪影響はみられなかった。育成期に½ skip 給与をし、成鶏期に自由給与した場合には、強健性、産卵性、飼料の利用性等総べて良い成績を認めたので、今後は、飼料の給与量(定量給与)および、季節の相違による影響等について検討を加える必要がある。